

2019年度在宅看護学実習で学生がとらえた倫理的課題

稲垣千文¹⁾、宇田優子¹⁾、杉本洋¹⁾、岩野千尋¹⁾、
佐々木沙織¹⁾ 小山歌子¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】 看護倫理教育の目的は、倫理的能力の向上にあり、学生が倫理的に「知ること」「見ること・知覚すること」「振り返ること」「行うこと」「あること」である。そして実習は、倫理的な課題について「見ること・知覚すること」が実際の場面を通して体験することができる場である。特にこの倫理的に知覚することは、学生の倫理的能力によるものが多くあり、本学看護学科の学生がどのようであるのかは不明である。また、居宅での訪問看護という特性から、学生の訪問先へ教員が同行することが難しく、場面から学生の倫理的問題に対して知覚を促すことが難しい現状である。2019年度の在宅看護学実習において、看護学科4年生の学生が倫理的課題をどのようにとらえたのか明らかにすることを目的とする。

【方法】 2019年度前期に在宅看護学実習を履修する学生を対象とし、Google フォームを用いアンケートを実施した。アンケート内容は、臨地実習日数、訪問回数、受け持ち療養者の疾患などと、倫理的問題と感じたことの有無と内容についてとした。実習終了時、学生へアンケート入力依頼、その内容を集計した。学生が倫理的課題としてとらえた内容は、そのままデータとし、類似するものに分類した。なお、本調査は、研究の意図を文書で説明し、不参加でも不利益は無いことを説明し同意を得た。

【結果】 2019年度の実習は、履修92名、担当教員6名、実習先は新潟市及び近隣の市町村の21施設で、1グループ2名から4名の全42グループであった。履修者92名のうち研究承諾が得られた90名について報告する。

1. 実習の概要

臨地実習日数は、平均6.9日(SD±0.5)、受け持ち療養者訪問回数2.7回(±0.97)、同行訪問回数11.7回(±4.5)であった。看護過程展開の為の受け持ち療養者の概要は、平均年齢70.9歳(±23.8)、性別男性56人(62.2%)、女性34人(37.8%)、利用制度別では、介護保険47名(52.0%)、医療保険42(47.0%)、その他1名(1%)であった。受け持ち療養者の主な疾患は、神経系32人(35.6%)、精神および行動の疾患15名(16.7%)、循環器系13人(14.4%)などであった。

2. 実習中の倫理的課題について

実習中、倫理的課題と感じたことの有無については、有り11名(12.2%)、無し79名(87.8%)であった。

倫理的課題としてとらえた内容は、【療養者への支援の

在り方】、【本人と家族の療養上の意見の相違】、【家族の療養者への無関心・無協力】3つに分けられた(表1)。

表1 学生がとらえた倫理的課題について

訪問看護師の支援の在り方	・一人暮らしにおける認知症利用者の内服管理
	・多系統萎縮症の方で今はまだ瞬きやハンドサインでかろうじて反応できるが段々それらができなくなりつつあり、本人の気持ちを確認する手段がなくなってしまうこと。
	・家族や本人にどこまで踏み込んでいか分からなかった時があった。
	・対象者が必要ないと判断した援助に対して現状をそのままにすると判断していたが、感染のリスクに関わる問題であり、生命にかかわる問題に繋がるため対象者に説明をし援助すべきではないかと感じた。
本人と家族の療養上の意見の相違	・療養環境に鳥の死骸が落ちており、片付ける時間はあったが、訪問看護師は療養者が気にしていないためと、そのままにしていた。
	・利用者と家族の意向が異なること
	・家族は処置を望むが、本人に苦痛が伴う場合
家族の療養者への無関心・無協力	・寝たきりの在宅療養者が腰部にあたるおむつが気になるのか、おむつの位置を下げたいと訴えていたが、その後の介護で排便があった場合、シーツが汚れてしまうことから、下げられなかった。それに対して、療養者は自分で下げようとして暴れてしまい、訪問看護師の対応が難しくなったため、介護者を呼んだ。その後、介護者が「下げるな」と身体を叩き、「下げるなら手をベッド柵に結ぶぞ」と話していた。
	・尿意・便意はあるが、軽労作で呼吸苦が出てしまうためベッド上でオムツでの排泄の利用者がいた。8人で暮らしているが、オムツ交換は誰もせず、尿器を当てることもしないため、10時間以上オムツを交換してもらえなかったり、ヘルパーや訪問看護が入るまで便を我慢したりしていた。
	・同居家族が介護に無関心であり、食事の用意がなかった。自分で食事を用意できない方だったが、同居家族がいるためヘルパーが食事を用意することでもできず、看護師も介入することができないでいた。(週に3回はデイケアを利用し、そこでは食事をとることができていた。)
	・糖尿病で血糖コントロールをしなくてはいけないのに家族が本人が欲しがるとそのまま食べ物を与えてしまう事

【考察】 この度の実習では、約1割の学生が倫理的課題をとらえたと報告していた。問題を抱えているケースは、学生の訪問の受け入れも厳しく、訪問が実現しないことが多いため、倫理的課題に学生が遭遇しないことが考えられる。さらに実習目標に倫理的課題について学ぶことが設定されていないため、学生は倫理的課題に対する意識が薄く、見逃していることも考えられる。

この度の調査では、学生の知覚についてのみの調査であった。倫理的課題に対してどのような学びであったかは不明である。そのため倫理的な課題への対処についても調査をするなど、学生の学びを調査する必要がある。

そして看護者は常に倫理を求められており、実習でも学生へ意識づけていく必要がある。

【結論】 本学看護学科4年生の在宅看護学実習中での倫理的課題について報告した学生は1割であった。倫理的能力の向上のため、実習目標に追加するなど、学生への意識づけが必要である。